

落語家を指さすと指先が腐る、と落語家は自嘲して笑いをとります。大学にも理学系研究科・理学部を指さすと、指先にカビが生えると思っている人がいるようです。

しかし平成十四年、理学系研究科・理学部にはそのような誤った印象を正す、大きなニュースがいくつもありました。

まず小柴昌俊名誉教授のノーベル賞受賞です。小柴先生のキャラクターとも相まって、理学研究がさわめて人間的でダイナミックなものであることが、多くの人に分かってもらえたのではないのでしょうか。基礎科学への先生の情熱が政府を動かし、光電子増倍管技術の最先端を押し広げ、今まで捉えることのできなかつた現象が捕まえられることが受賞につながったことは、記憶に新しいところです。

さらに、天文学専攻の牧野淳一郎助教授らが世界最高速の超並列コンピュータに対して与えられるゴードン・ベル賞を受賞したこと、物理学専攻の樽茶清悟教授が人工原子・分子の実現により仁科記念賞を受賞したこと、同専攻の早野龍五教授らのグループが反物質の大量生成に成功したこと（淡青8号「サイエンスへの招待」参照）など、最先端の基礎研究こそが最先端の技術にインセンティブを与えていることが明快に示されました。

上記の研究について詳しいことは理学部のホームページ (<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/>) に紹介されているので、是非ご覧になつていただきたいところです。またそのサイトをご覧になれば、理学部の仲間がさまざまな研究と格闘している様子が、数多く紹介されているのに気づかれることでしょう。理学部も大きく変貌を遂げているのです。

理学部のもう一つの広報活動に公開講演会があります。これは年二回のペースで行って

教育・研究の現場から

理学系研究科・理学部の変った所と変わらない所

Graduate School of Science and Faculty of Science

浦辺 徹郎

大学院理学系研究科・理学部 教授 広報委員長

<http://www.s.u-tokyo.ac.jp/>

落語家を指さすと指先が腐る、と落語家は自嘲して笑いをとります。
大学にも理学系研究科・理学部を指さすと、指先にカビが生えると思っている人がいるようです。



第2回公開講演会において、
鞭毛運動の機構についての質問に答える真行寺千佳子助教授

るもので、これまでの様子はやはりホームページでみることができます。毎回アンケートをお願いしていますが、熱心な聴衆の声を聞くたびに、大学への期待が高いことを実感させられております。また地方の高校生など、講演会に参加できない人のために、修学旅行時の大学見学なども受入れています。いつも質問が多く出て、手こたえを感じています。

一方で、理学系研究科・理学部は頑固に変えないところも持っています。
国立大学の法人化などの動きに象徴されるように、大学の枠組みが大きく変わろうとしているなかで、短期的な見通しの議論が出版されております。しかしわれわれは長期的視

野から自身の将来像を検討し、教育研究の方針を立て、それを推進する上での規範を制定することが必要であると考えました。最先端の知の創造や継承、次代を担う人材の育成は、人間が獲得した不朽の知の営みであり、人類の知性の根幹を成すものだからです。その検討の中で平成十四年四月に制定したのが「理学系研究科・理学部憲章」です。これは理学系研究科・理学部における教育・研究は、自己による絶えざる点検と外部からの厳正な評価、差別・偏見の排除、および社会貢献という理念の下に、行っていくことを決意したものです。皆様のご理解とご支援をお願い致します。



オープンキャンパスで比屋根 肇助教授の
研究の説明に聞き入る高校生

本郷キャンパスにある三四郎池の西側に、櫻の古木が南北に立ち並んでいます。社会科学研究所は、この並木に面する図書館団地と呼ばれる古い建物の一角を占めています。第二次大戦後も間もない一九四六年、当時の南原繁総長のイニシアティブによって設置されました。当初は、わずか五部門十人のスタッフで発足しましたが、現在では四大部門（比較現代政治、比較現代経済、比較現代社会）に「センター」を加え、教授、助教授三十七人、内外客員六人、助手十二人および事務職員二人を擁するに至りました。研究所を設立するにあたって起草された「設置事由」は、戦後日本が「民主主義的平和国家」として発展していくため、「広く世界各国の法律、政治、経済の制度及び事情に関し正確なる資料を組織的・系統的に蒐集し、かつこれが厳密に科学的なる比較研究を行ふ」ことを研究所の目的に掲げました。設立後数十年を数えた現在でもこの点において変わりはありません。世界中の諸国家、諸地域との比較の観点を念頭に、社会科学諸学の多様なアプローチを用いて現代の日本社会を実証的批判的に分析し、その成果を学際的に総合することを目指しています。スタッフは、各研究科の講義、演習を担当し、大学院教育にも携わっていますが、社会科学研究所が東京大学の附置研究所としてあるのは、このような研究活動によってこそ大学の研究・教育体制に有機的に結びつくからであります。活動の中核は、所内の大部分のスタッフが共同して参加する全所的研究にあります。近時では、福祉国家、現代日本社会、二〇世紀システムなどをテーマとして数年ごとに共同研究の成果を公にしています。二〇〇〇年度からは今日的な問題を正面から取り上げ、全所的プロジェクト研究「失われた十年？ 九〇年代日本をとらえなおす」を

社会科学研究所の素顔

Institute of Social Science

平島 健司

社会科学研究所 教授

<http://jww.iss.u-tokyo.ac.jp/>

本郷キャンパスにある三四郎池の西側に、櫻の古木が南北に立ち並んでいます。社会科学研究所は、この並木に面する図書館団地と呼ばれる古い建物の一角を占めています。

発足させました。このプロジェクト研究は、スタッフが恒常的に組織するグループ共同研究を足場とし、内外に研究者を幅広く包摂する研究ネットワークによって進められています。

人物交流を通じた国際的研究ネットワークの構築は、長年に及び研究所が力を注いだ事業の一つです。研究所には、常時二名の外国人客員教授が滞在しています。また、アメリカ、ヨーロッパ、アジアの研究機関との間で学術交流協定に基づく研究交流を行うほか、年間三〇名を超える客員研究員を受け入れています。このような人物交流の実績に基づき、活発に国際シンポジウムを開催し、国際共同研究の組織化を進めています。海外の日本社会研究者に対しては、インターネットを場とするフォーラム (SOL Forum) を運営し、ニューズレター (Social Science Japan) を定期的に配布するほか、英文専門雑誌 (Social Science Japan Journal) をオックスフォード大学出版会から刊行しています。

国際的な研究ネットワークを、データの収集、蓄積と分析の側面から支えるのが、一九九六年に新設された日本社会研究情報センターの役割です。調査個票データを電子媒体化したデータ・アーカイブを運営し、内外の研究者に二次分析の素材を提供しています。二次分析の普及のため、公開セミナーを開催するなど教育活動にも努めています。

社会科学研究所は、社会科学研究者の間では長らく「社研」という略称によって親しまれてきました。この呼称は、国際的ネットワークが拡大するとともに海外でも『Stacker』としてそのまま定着しています。英語では「震撼させられた」という意味ですが、社研は、ここに集まる人々が知的に「揺さぶられる」という出会いと相互啓発の場であり続けたいと考えています。



山上会館で開催された公開シンポジウムのひとコマ



データ・アーカイブが開催している連続公開セミナーの様子



研究所玄関と櫻並木